

橋本昌樹

回原坂

西南役連作

橋本昌樹

田原坂

西南役連作

中央公論社

田原坂―西南役連作

定価六五〇円

昭和四十七年十一月三十日初版
昭和四十八年三月五日三版

著者 橋本昌樹

発行者 山越 豊

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話(五六一)五九二一

振替東京三四

◎一九七二 検印廃止

△著者略歴▽ 橋本昌樹 (はしもと・まさき) 本名・橋本正季・昭和三年東京に生る。昭和二十年陸軍予科士官学校中退、昭和二十五年東京高等師範学校卒業、中学教員を経て昭和二十六、八年にかけNHKにアナウンサーとして勤務した後、再び中・高校に教員として勤務、昭和四十六年退職、現在に至る。

目次

一	軍旗喪失前後	5
二	風声鶴唳	33
三	籠城	62
四	田原坂	95
五	偏師出陣	126
六	春光	161
七	突圍成れども	192
八	新緑	223
九	峠	254
	エピソード	
	あとがき	281

題字 松本清張
裝幀 井本裕昭

田原坂——西南役連作

一 軍旗喪失前後

一

明治十年の西南戦役中、植木の戦いは有名である。

有名になったのは、この戦いで、乃木希典の率いる第十四聯隊が聯隊旗を奪われ、やがてそれが三十五年後の乃木の殉死と結びついたからである。

しかし、有名である割りには、この戦闘がどのようにして起ったのか、また、どのように経過したのか、ほとんど知られていない。

小倉營所の第十四聯隊が動き出したのは、二月十一日、第四回の紀元節の日であった。払暁四時三十分、北楯利盛大尉の指揮する第二大隊第一中隊が、小倉營所を發し、ひそかに、海路長崎にむかった。長崎港警備のための分遣隊である。すでに一月の末から私学校党は鹿児島島の造船所や工廠・火薬庫等を襲い、叛亂の兆頭然たるものがあつた。

陸軍卿山県有朋が、鹿児島県下暴動の形跡ありとして熊本鎮台に警備を内示し、その密達が乃木の許にも伝えられたのは、二月六日であつた。小倉營所のうち一箇中隊を長崎に分遣すべしという、熊本鎮台司令長官谷干城少将からの命令が届いたのは、その翌七日である。乃木は、直ちに分遣隊として第二大隊第一中隊を選び、その旨鎮台に即答している。それなのに、分遣隊の出發が十一日まで延びたのはなぜか。乃木は、熊本鎮台から送られてくる金と、馬関（下関）から届けられるスナイドル（Shell）銃とを待っていたのである。

一箇中隊を輸送する船を傭うにも、携帯口糧のパン（後という乾パン）を買うのにも、金がいる。それらの用意が整つて出發してからも、人夫や馬を傭つたり、車を借り上げたり、舍營のための家屋を借りたりするのに、多額の金が必要である（屋根の下に宿營するのを舍營、屋根のない所で宿營するのを露營という）。当時、輜重小隊の制はあつたが、一鎮台に一箇小隊しか設けられておらず、小倉營所に属する輜重隊は無かつた。彈藥や兵糧を運ぶのは、すべて臨時に傭い上げた人夫の力によるはかばかかつた。

金は届いた。しかし、スナイドル銃はまだ来ない。分遣隊は、新銃を受け取れぬまま、旧式のエンヒール(Enfield)銃を担^なって出発した。その夜から、雪になった。

二

翌二月十二日。

鹿兒島では、小倉より遅れて、この日の朝から雪が降り出していた。いつもなら、稀に雪が降っても、地に触れるとすぐ融けて消えてしまいか、斑^{まだら}な模様を残すだけなのに、この日の雪は、地を白く包み終ってもなお止む気配を見せなかった。鹿兒島県庁に、陸軍大将西郷隆盛・同少将桐野利秋・同少将篠原国幹の連名による「今般政府へ尋問之筋^{ことわり}有之」云々の『率兵上京届』がさし出されたのはこの日であつた。

同じ日、乃木は、小倉の営所で、窓外の風雪をじっと見ていた。前夜からの雪は、強風をともなつて、北国の吹雪のように荒れつづけていた。乃木希典、この時数え年二十九歳、少佐、第十四聯隊長心得、小倉営所司令官である。聯隊長には大佐もしくは中佐を以て充て^あることになつてい

るので、乃木はまだ正式の聯隊長にはなれない。

乃木は、舞い狂う雪片を眺めながら、じっと待っている。熊本鎮台からの連絡と、スナイドル銃とを。

前日のうちに長崎に着いた北楯大尉から、けさ、長崎分遣の兵力をもっと増加してくれという要請の電報が届いた。長崎県令からも、同様の要請があつた。

薩軍が、陸路を北上するか、海路直ちに長崎を衝き、軍艦の奪取をはかるか、まだわからない。もし長崎を急襲されれば、今の分遣隊の兵力では支え切れないことはわかっている。しかし、薩軍が陸路を取れば、熊本の守りのために一兵でも多く必要になる。

——だが、薩軍が海路を選ぶだろうか？ その可能性があるだろうか。

ほとんどない、と乃木は判断した。私学校党には海軍はない。西郷隆盛のあとを追つて退官帰郷した軍人たちも、ほとんど陸軍ばかりである。たとい鹿兒島湾内に停泊中の幾隻かの艦船の奪取に成功しても、熟練した士官や水兵のいない薩軍が、外洋を航して長崎を襲うことはまず考えられない。しかし、無視はできない。海軍士官の経歴を持っ

た人間はいなくとも、旧藩時代の薩の海軍は有名であった。蒸気船を操り艦隊を組んで近代戦を行ないうる能力を持った人材が、どこにひそんでいないとも限らない。

——兵を進めるとすれば、久留米だ。

久留米なら、長崎まで三十余里、熊本まで二十余里。そして、久留米には電信局がある。薩軍が陸海どちらの道を取って出発したかの探偵報告を受け取ってから行軍を始めても、間に合う。

乃木は、長崎からの要請を断わり、久留米に若干隊を分遣する案を熊本鎮台に示し、許可を求めた。

その返事も、まだ来ない。スナイドルも、まだ来ない。

製造は完了したというしらせがあった。この暴風雪で、船積みができないのだろうか、船が出航できないのだろうか。

今、十四聯隊に配備されているエンヒールは、先装式、つまり先ごめの銃である。一発撃つごとに、銃口を手もとに引き寄せ、火薬と弾丸とを銃口から填め、棚杖で弾丸をしっかりと押しこめてから、銃をかまえ、撃針のパネを引き、それでやっと引き銃を引く段どりになる。それに対し、スナイドルは後装式の施条銃である。銃を構えたまま、遊底

の操作だけで新しい弾薬を装填できる。だから、エンヒールを一発撃つ間にスナイドルは五発も十発も撃てると言われるほど、発射速度に大差がある。その上、先装銃の火薬は雨などで濡れると発火しにくいのにに対し、スナイドルは、弾丸と火薬が一体になった弾薬筒を使うので、雨に影響されない。さらに、もう一つスナイドルの特長は、銃槍（*point* 後にいう銃剣）をつけたまま射撃ができることであつた。先装銃でも、銃槍をつけることはできる。しかし、一発発射するごとに棚杖を使うので、後装銃のように銃身と棚杖と二つの支点によって堅固に装着することはできないし、銃槍をつけたまま弾薬を装填しようとすれば自分を傷つける恐れがあつたので、有効には使われていなかった。スナイドルなら、銃槍をつけておいて射撃を続けながら敵に接近し、白兵戦に移る、という戦法が可能であつたのに対し、エンヒールではそれができなかったのである。（このため、薩軍ははじめから銃槍をほとんど携帯せず、それと対比して官軍の着剣銃が目立ったので、九州一円で官軍のことを「剣つき鉄砲」とあだ名して呼ぶようになった。）スナイドルは、エンヒールからの改造が可能である。陸

軍では、国軍創設後暫くは、各藩から持ち寄った銃をそのまま使用していたが、明治六年以後、スナイドルを制式とすることにきめ、改造に着手した。しかし、まだ砲兵工廠も小さく、技術も若く、熟練工も少なく、改造は進まなかった。西南役勃発前に新銃との交換を完了していたのは、近衛兵と東京鎮台兵とだけであった。

乃木は、陸軍卿伝令使（副官）をしていたころから、新銃の優越性を熟知している。新銃の請求は、近ごろになって急に出したものではない。たとえば、明治九年五月六日の乃木日記に「銃器^{そく}餽^く悪ノ事ヲ話ス」とある。

乃木が伝令使をしていた時の陸軍卿は山県有朋である。

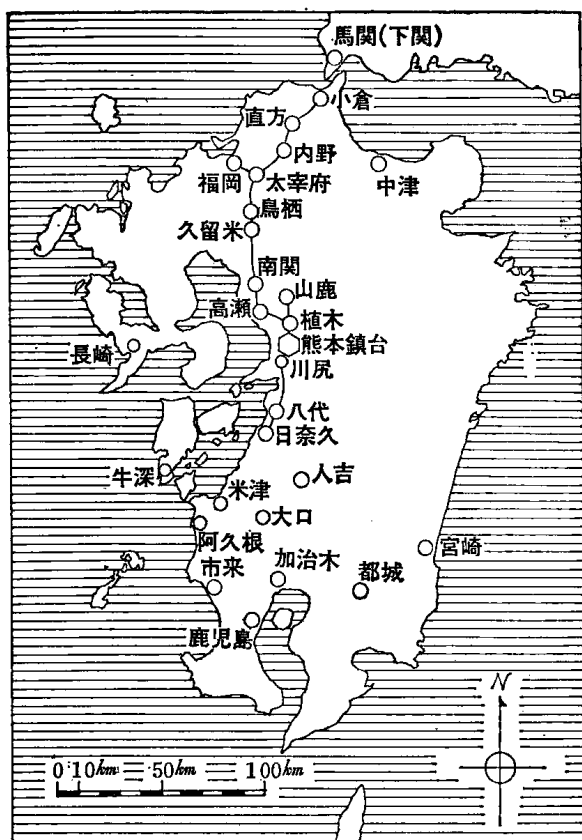
慶応二年の、いわゆる四境戦争のとき、当時十八歳で文蔵と称していた乃木は、砲一門の長として豊前の幕軍と戦った。小倉附近がその時の戦場であった。乃木が属していたのは報国隊だが、この戦線の指揮をとったのは奇兵隊長山県狂介、後の有朋である。その時以来の間柄である。非職中の乃木を陸軍卿伝令使に抜擢したのも山県であり、前原一誠の弟山田頌太郎少佐が小倉の営所を預かっていたのを更迭し、後任に乃木をさし向けたのも、山県であった。

小倉営所着任以来、乃木はしばしば山県に直接書翰を送って西陲^{さいじ}不穩の状況を報告し、兵備充実の要を説いた。しかし、山県にとっては、東北加越や関八州の旧藩士の向背のほうが気がかりであった。諸方から言ってくる増兵要求に一々応じていたら、今の十倍の陸軍を作っても足りない。それに、乃木は今は陸軍卿伝令使ではない。鎮台司令長官を通じて直接陸軍卿に具申するのは止めさせなければならぬ。——山県はあえて乃木の報告や具申を黙殺した。

そのために、山県は一つの苦い記憶を作った。前年の神風連の乱のとき、乃木からいち早く「暴発近きにあり」の警告が届いた。その時乃木は、熊本鎮台司令長官の種田少将にも、山県に報じたのと同様な警告を送ったのだが、種田はこれを軽視し、無警戒のまま、参謀長高島茂徳中佐、熊本県令安岡良亮とともに横死した。

——あのとき、陸軍省からも電報を一本掛けておいてやれば、ああいうことにはならなかったかもしれない。

と山県は思う。思いはしても、乃木の進言や請求をそのまま受け入れるわけにはいかないのだ。情勢不穩の地はあまりに多く、常備兵力はあまりに少なく、兵器生産能力も



またあまりに低かった。

三

乃木がスナイドルと熊本からの返信を待ち暮らした二

月十二日、山県は、京都で太政大臣三条実美の宿所を訪れ、戦略書を示している。三条も山県も、聖上の京都行幸に供奉して一月末から京都に来ていた。

東京遷都以来、どこか気が抜けたようになっていた京の町

(明治十年現在九州全図)

は、歓迎にわき立っていた。「禁裏様がお帰りになった」「お戻りじゃお戻りじゃ」と皆が言っているそうである。「天子様がおいでになった」とか「行幸」とかいう言葉を使う者はいない。辻々には常緑樹の葉で飾った奉迎の門が立ち、灯籠や、提灯や、国旗や、金屏風や（これは、通りに面した戸をすべて開け放ち、家族一同が金屏風を背にして礼装をして坐り、行列をお迎えしたのだそうだ）、紋つきの幕や、——当時の新聞には「祇園祭と天長節が一度に来るが如し」「御道筋の町々は殊に綺羅を飾りて筆紙にも尽し難き有様なり」などと記してい

る。

町のにぎわいをよそに、三条と山県はひっそりと対座している。兩人の間に拈げられた山県の戦略書には、

「南隅の事情甚だ切迫、其発作に当り、如何なる景況を現出し、如何なる變動に立至るも計り難し、此事、実に浅少に非ざるなり。而して南隅一たび反動せば、勢之に応ずる者、蓋し、両肥、久留米・柳川（共に筑後）、南海にては、阿波・土佐、山陽山陰にては、因・備、東海・東山及び北陸にては、彦根（近江）・桑名（伊勢）・静岡（駿河）・松代（信濃）・大垣（美濃）・高田（越後）・金沢（加賀）及び酒田（羽前）・津軽（陸奥）・会津（岩代）・米沢（羽前）なり。而して関八州の館林（上野）・佐倉（下総）其他の旧小藩の向背、一として定まる者なし。故に其愛する所を奪ふの旨趣に基き、左に戦略を概論す。

南隅破裂するに当り、渠の策略其何の点に出づるは量り知るべからずと雖も、之を要するに三策に過ぎず。第一には、火船に乗じて東京或は浪花に突入すること、第二には、長崎及び熊本鎮台を襲撃し、全九州を破り、以て中原に出づること、第三には、鹿児島に割拠し、以て全国の動搖を

窺ひ、暗に海内の人心を揣摩し、時機に投じて中原を破ること、恐らくはこの三策の外に出でずと洞察せり。因て其何の点に出づるも、我に在ては他を顧みず、力を一にして鹿児島城に向ひ、海陸并進、桜島湾（大隅）に突入し、奮闘攻撃し、瞬間鹿児島城を殲滅するに期して後に止む。而して更に四国・中国及び両肥等に向て之を又撃破せんも亦難きに非ず。……」

山県は、すでに、陸軍省の留守を預かっている大山巖少将をはじめ、各鎮台の司令長官にひそかに連絡して、出征の準備をはじめさせていた。二月十日、まず出征準備を命ぜられたのは、在京五隊、在阪二隊。

近衛歩兵一聯隊

東京鎮台歩兵一大隊

東京山砲兵一大隊

東京輜重兵一小隊

東京騎兵一大隊

大阪鎮台歩兵一大隊

大阪山砲兵一大隊

これだけである。兵数にしておよそ四千人に過ぎない。

しかし、これだけでも、東京・大阪の常備兵力の三分の一を超えるのだった。

出征準備については、三条の承認を得、上裁を仰いである。三条は、承認はしたもの、何とか戦争をくいとめたいと考えているのを、山県は知っている。

——だが、お上は……

山県は、聖上の御胸中をはかりかねている。

今度の行幸は、孝明天皇祭のため、後月輪東の御陵と畝傍山東北の御陵の御親拝が主な目的である。しかし、前年以来、西陲不穩の状はすでにあらわれている。行幸は御猶豫、あるいはお取り止めになるべきであるという意見は、何人もの当路者から出された。東京御発輦の予定は一月十四日から二十二日に、さらに二十四日に延期されたが、結局、聖上の強い御意志によって決行された。そして、御召艦高雄丸は、神戸までの任をおわると、視察の任を帯びた川村海軍大輔・林内務少輔を乗せて、直ちに鹿児島にむかったのであった。

——あるいはお上は、京都を前進本営とすることをはじめからお考えだったのかもしれない。

山県がそんなことを考えるようになったのは、ずっとあのことである。

四

二月十三日。

小倉では、風雪がまだ少しの衰えの色も見せず營所を覆っていた。この日は火曜だが、第十四聯隊は休業である。

乃木日記に「臨時祭、休業」とあるが、何の祭か明らかでない。熊本鎮台では、十一日の紀元節に引続き、十二、十三の両日、神風連の乱のときの死者を祭る招魂祭を催し、兵卒の外出を禁止しているが、十四聯隊もそれに揃えたものであろうか。熊本鎮台の外出禁止は、戦乱の兆しに怖気づいた兵卒の脱走を防ぐためのもだったという。十四聯隊に関しては、あらかじめ外出禁止等の企図はなかったようである。しかし、早朝熊本鎮台から電報で非常警備を命じてきた。結果的にはやはり外出禁止である。

非常警備の命令が下ると、聯隊副官から聯隊喇叭長に非常号音の吹奏を命じ、各大隊の喇叭手が市中各所に手分けして散り、要所要所で非常ラッパを吹く、というのがその

こちらの非常召集のやり方であった。營外居住の將校・下士官や軍吏（主計官）が、ラッパを聞きつけていそいで集まってくる。

乃木は、聯隊副官の榎峠盛敏大尉と会計官堀軍吏副（中尉相当官）と呼んで、鎮台からの電報が非常警備命令だけでなく、明十四日鎮台で軍議を開くため自分に出台を命じてきたことを告げ、留守中の諸事を托した、なかなか、スナイドルの催促と、到着した際の受領や、エンヒールの返納のことについて念を押した。ついで、第一大隊長津下弘少佐が遅れて現われた。乃木は、久留米分遣が鎮台から許可されたことを告げ、第一大隊の半大隊出兵を命じた（大隊は四箇中隊から成り、その第一・二中隊を右半大隊、第三・四中隊を左半大隊と称する）。また、福岡分営屯在第三大隊の吉松秀枝少佐に電報を發し、出動準備を命じた。

このあたりから、従来の諸書の記述は混乱を生じてくる。一般向に書かれた西南戦役通史の最初のものは、川崎紫山（三郎）の『西南戦史』であろう。明治二十六年初版發行である。それにはこうなっている。

「初め薩軍の国境を出でんとするや、小倉營所、第十四聯

隊長乃木少佐（希典）谷少將の命に由り、小倉の兵を以て、尽く熊本に集合せんとせり。乃木少佐、天資精悍、邁往果敢、難を排き險を冒して進取するの勇あり。二月十四日、自ら小倉營所第十四聯隊第一大隊の左半大隊を率ゐ、同日午前六時、風雪を冒し、小倉を發して黒崎に午餐し、黒崎より草鞋を以て靴に換へ、歩行に便ならしめ、直方駅に宿し、同午後六時、遂に熊本に達せり。」

「同午後六時」というのは、文脈に従えば二月十四日のようだが、「直方駅に宿し」というのだから、二月十五日とも取れる。

『西南戦史』の文は次のように続く。

「又山脇大尉以下半大隊は、十五日直方を發して内野に宿せしが、此日払曉風雪紛々、寒威凜烈、兵卒甚だ疲勞せり。十六日、松崎に宿し、諸將皆此駅の久留米に近きを以て、巡查をして土族の動静を偵察せしめ、頗る警戒を加へたり。然るに風雪前夜より止みしも、融解の為に道路泥濘甚だ深く、行進大に渋滞せり。此日乃木少佐、熊本を發して、此軍に会せんとせり。十七日午前、山脇以下の隊久留米に入。乃木至り、命じて明日府中に転陣し、其一小隊を分ち、

行軍の名を以て久留米近傍を巡行し、且つ府中久留米傍近の地図を製せしめ、乃木直に去て福岡に赴けり。」

少し注意してこの文を読めば、その荒唐無稽なことにすぐ気づくはずである。

乃木の率いた第一大隊左半大隊は、直方を發してその日のうちに熊本に達したことになる一方、山脇大尉以下半大隊は、直方を發してから翌々日にやっと久留米についている。久留米から熊本までは、なお二日分の行程である。

明治十年当時の地図によって調べてみると、山脇大尉以下半大隊の速度がほぼ妥当なものであることがわかる。乃木の率いた隊が、午前六時に小倉を發し、黒崎で午餐したというが、黒崎というのは洞海湾の一番奥に近いところで、小倉とは目と鼻の間、現在の鉄道幹程で十四・九キロに過ぎない。午前六時からひるどきまでに十五キロぐらいいしか進めない隊が、そのあと熊本まで約百六十キロを、同日、あるいは翌日の午後六時までにどのようにして踏破するることができたのか。

その他の諸書、乃木が一隊を率いて小倉を出発したとしているのは、いずれも誤りである。第一大隊左半大隊は即

ち山脇大尉の率いる半大隊であり（第三中隊長山脇鎭太郎大尉、第四中隊長丸井政昭大尉）、この時乃木が直接率いていた隊はない。二月十四日午後六時、熊本城内の鎮台司令部に到着したのは、乃木希典ひとり、あるいはそれに副官や下副官、馬丁・従僕等も従っていたかもしれないが、不眠不休で馬を駆った小人数であつたはずだ。

乃木が小倉を發したのは、乃木日記、参謀本部の『征西戦記稿』等によれば、二月十三日午後一時、あるいは午後一時四十分、あるいは午後二時。そして、二月十四日午後六時から熊本鎮台で開かれた軍議の席に、乃木は間に合っている。小倉・熊本間は、現在の鉄道幹程で百六十余キロ、明治十年当時の地図に記入されている道路里程をキロメートルに換算すると、百七十数キロある。その間を二十八、九時間で踏破したことになる。不眠不休で急いだとしても、一時間平均六キロに近い速度である。軍隊の経験のある人なら、六キロ行軍というのがどんなにたいへんなものか、また、その速度を三十時間近く不眠不休で維持できるものかどうかわかるであらう。ことに途中山道も多く、行程の前半は風雪を衝いての行進であることを考えると、騎馬に

よる小人数の行旅としか判断できない。もちろん明治初年の兵は現代人よりもずっと健脚である。それでも、当時普通の行軍速度は一日に七、八里。せいぜい十里までとされていた。また、当時の歩兵聯隊で乗馬を支給されていたのは、聯隊長・大隊長・聯隊副官・大隊副官、それに軍医である。

推定される事実を簡単にまとめると次のようになる。

乃木は、二月十三日ひる過ぎ、単身、あるいは副官等二、三人を伴った程度で、騎乗して小倉を發し、十四日午後六時より前に熊本に着いた。乃木から半大隊久留米出兵を命ぜられた第一大隊長津下少佐は、山脇大尉に左半大隊を率いて出發するよう命じた。この半大隊は十三日一杯を行装準備に費し、乃木の出發より十数時間遅れて十四日早朝小倉を發し、十七日久留米に達した。

五

十三日朝、軍議のため急行出台すべしとの命令電報を受け取った乃木は、ひる過ぎまで何をしていたのか。乃木日記には、「津下来ル。出兵ヲ命ズ」と記したあと、「書福原

大佐ニ上海ニ送ル。同布施ニ送り、Okane ni divgoeno yakoto mada, oibai.」となっている。

明治九年末から十年初頭にかけての、福原和勝大佐と乃木との往復書翰は有名である。乃木の福原宛書翰草稿は、明治十年一月七日筆と推定されるものが、公刊されているものの最後である。二月十三日には、どんな内容の書を送ったものかわからない。おそらくは、出陣にあたって、再三にわたった往復書翰の結言をしたものであったろう。布施貫一や妹カネ（キネ）への書翰や贈与も、永訣となるかもしれないという心を秘めたものであったろう。このころから乃木は出陣前には必ず幾通かの手紙を書き、また、写真をうつしていたようである。

六

二月十三日、乃木が小倉営所で手紙をしたためていた頃か、馬にだく足を打たせて雪道を急いでいた頃か、鹿児島では、降りしきる雪の中を、武器を携えた老若さまさまの男たちが旧練兵場を目ざして続々と集まっていた。この日、薩軍の編制が行なわれたのである。